ロンドンオリンピックにおける選手のジェンダー表象
～テレビニュース内容分析～

小　林　直　美
（男女共同参画推進室米沢分室助教）

山形大学紀要（社会科学）第48巻第１号別刷
平成29年（2017）７月

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

論　説

ロンドンオリンピックにおける選手のジェンダー表象
～テレビニュース内容分析～

小林　直美
（男女共同参画推進室米沢分室助教）

1. はじめに

1. 1. 研究の目的

オリンピックはテレビ向けに演出された最も大きなスポーツ・メガイベントの１つである。このようなオリンピックはテレビニュースの報道量も多く（中・日吉・小林 2015a）、視聴率の高いコンテンツである。同時にオリンピックに関する情報を発信するテレビをはじめとするメディアは、人々の女性スポーツに対する認識に影響する象徴的な権力である。ゆえにLenskyjは、ジェンダー・ポリティクスとオリンピック産業のインターセクショナリティという視点から、規範的言説を流布するメディアを批判的に分析することの必要性を述べている（Lenskyj 2008）。

本研究の第一の目的は、夏季オリンピックについてのメディア研究の中でもロンドンオリンピック開催期間中の日本のテレビニュース番組を対象とし、女性選手のジェンダー表象について内容分析を行い、その傾向を明らかにすることである。第二の目的は先行研究から設けたリサーチ・クエスチョン（以下RQという）の検証を行うことである。これらを通じ、日本のテレビニュース番組におけるスポーツ選手のジェンダー秩序の一端を明らかにする。

本稿の構成は、１章でオリンピックに関するジェンダーとメディア研究について概観し、２章ではロンドンオリンピックの概要について触れ、３章で内容分析の手法について説明をし、４章では内容分析の結果を示し、最後の５章でRQの検証と考察を行う。

1. 2. スポーツにおけるジェンダー

本節ではスポーツと女性選手との関係性およびその歴史をジェンダー視点から概観していく。19世紀のイギリスにおいて、国際的統一ルールと組織化された競技スポーツとして近代スポーツは誕生した。近代スポーツ発展の特徴をジェンダーの視点から見つめ直すと、近代社会の成立に関係する「男性的原理」にあり、「近代社会における＜男らしさ＞の重要な再生産装置」（伊藤 1999：89）と指摘されている。また來田によると、このような近代スポーツは、男性的

原理による社会のあり方を映す鏡として、またはアスレティシズムのイデオロギーを男性に対し教育する文化的装置として機能していた(來田 2004a)。一方女性には男性とは異なる目的と意味づけがなされた。女性は競技性の高いスポーツから排除され、礼儀作法や優雅な振る舞い、社交のための教養となることが目的と考えられていた。このように、近代スポーツは成立段階において既にダブル・スタンダードが存在していた（來田 2004b)。

スポーツにおける男女の平等と公平を求める動きは、1960年代後半の第二波フェミニズムによる影響が大きく、次節で述べるがそれらはオリンピックの女性選手の参加者数や競技種目の増加につながってゆく。同時にフェミニズム理論はスポーツに応用されさまざまな調査・分析が行われていった。既に多くの論考で指摘されているが、第二波フェミニズムは「性」には「セックス」「ジェンダー」「セクシュアリティ」が含まれ、それぞれの意味を定義したことにより、フェミニズム研究からジェンダー研究へと発展した。ここで述べる「ジェンダー」とは、生物学的･解剖学的な男女（雌雄）のちがいを意味する「性」（sex）に対して社会的･文化的･制度的に形成される男らしさ・女らしさを表す。またジェンダーの定義は大勢の研究者が試みているが、代表的なものの１つとして、Scottはジェンダーを「肉体的差異に意味を付与する知」（Scott, J.W.1988=1992）としている。

Hallはスポーツとジェンダーに関する研究を「カテゴリー的研究」、「配分的研究」、「関係論的分析」の３つの分析レベルに分類した。「配分的研究」は、「限られた資源の配分を吟味し、機会やアクセスそれに財政資源の不平等に注意を向ける」（Hall 1996＝2001：24）ものである。第二波フェミニズム以降、ジェンダーや人種について配分的研究が行われ不平等な資源配分のデータを明らかにした。この「配分的研究」にはメディアにおける不平等な取扱い、報道や描き方、文脈や文の分析、ジャーナリスト数の調査等が含まれる。このような配分的研究はスポーツにおける女性の立ち位置を把握するには有効なアプローチであるが、不平等が生み出される原因や理由の解明には至らない。ゆえにHallは関係論的分析の重要性を説いている（Hall 1996＝2001)。

以上のように様々な競技・種目、年齢や性別、プロスポーツやアマチュアスポーツを対象としてフェミニズム理論を応用した研究がなされているが、次節では本研究の調査対象であるオリンピックと女性選手について競技数と参加者数の変遷からロンドンオリンピックの位置づけを行う。

1. 3. オリンピックと女性選手

近代オリンピックを女性選手の参加という点で振り返ると、第１回アテネ大会（1896年）は９競技が行われ、参加国14ヶ国、選手は男子のみ241人の女子禁制の大会であった。女性選手が初めて参加したのは第２回パリ大会（1900年）からであり、16競技95種目が行われ、24の国

と地域から997人の選手が参加した。そのうち女性選手は2.2%（22人）であった（公益社団法人日本オリンピック委員会 2017）。その後、ヘルシンキオリンピック（1952年）で全選手に占める女性選手の割合が10.5%（519人）に達し、モントリオールオリンピック（1976年）で20.7%（1260人）に至った。これらの成果は、1960年代後半から始まった第二波フェミニズムによるところが大きい。そしてスポーツ界全体の女性の権利拡大と男女平等を求める動きは、1994年に開催された第1回世界女性スポーツ会議へとつながっていく。この会議で採択されたブライトン宣言[1]は、「スポーツのあらゆる面において、女性が最大限に関わることを可能にし、そして尊重する、スポーツ文化を発展させること」（女性スポーツセンター 2017）を目的としたものである。この宣言によってオリンピックにおける女性競技の増加と参加人数は加速し、採択前に開催されたバルセロナオリンピック（1992年）では女性選手の参加比率が28.9%（2,704人）であったのに対し、採択後に開催されたアトランタオリンピック（1996年）では女性選手が34.0%（3,512人）に増加した。その後アテネオリンピック（2004年）、北京オリンピック（2008年）では2大会続けて女性選手の参加比率が4割を超えた。続くロンドンオリンピックは全競技、全参加国と地域で女性選手が参加した初めての大会であり、女性選手の参加数が史上最多の44.2%（4,675人）に上った（International Olympic Committee 2012）。

上記から、第1回大会から116年の長い歳月を経て、女性選手は競技への参加と参加者数という点で平等に近づきつつあるといえよう。

1. 4. オリンピックにおけるジェンダーとメディア

第二波フェミニズムの影響を受け、1980年代にジェンダーとメディア研究が日本において発展していくが、スポーツ分野におけるジェンダーとメディア研究は、それより遅れて散見されるようになる（Iida 2010：226）。本節では特にオリンピックを対象としたジェンダーとメディア研究について概観していく。

日本では、2000年以降にオリンピックにおけるジェンダーとメディア研究が発展し[2]、男女の差異やバイアス、男性の眼差しや選手たちのホモソーシャルな関係について、ジェンダーやカルチュラル・スタディーズの理論や記号論の分析枠組みを用い研究成果が蓄積されてきた。たとえば競技や選手の報道量に注目したもの（飯田 2007；山本 2015；山本・中村・武内 2016）、選手の身体や表象（阿部 2008；飯田 2003；平川 2009；田中 2012）、開会式（登丸 2007；登丸 2010）やナショナリズム（阿部2008）等特定のテーマに着目した研究や送り手調査（飯田 2008）、オーディエンス調査（飯田 2005）があげられる。これらの研究は女性選手の報道量、文脈や映像表象が男性と異なり不平等であること、年齢や容姿に注目され、実力に比して矮小化した扱いを受ける傾向があること、ジェンダー化された身体、男性の眼差しにさらされ性の対象とされていることを明らかにした。しかし、分析されたメディアは新聞が多く、オリン

ピック開催時のテレビニュースを分析対象とした実証研究は登丸が行ったトリノオリンピック開会式における女性の役割分析（登丸 2010）のみであり、非常に少ないといえよう。

また、アテネオリンピック報道の国際比較を新聞で行ったBruceらは、日常的な新聞やテレビのスポーツ報道において女性選手は10％以下の出現率であるのに対し、オリンピック等国際的イベント時には女性選手のメディア報道は増加する傾向にあることを指摘している（Bruce eds. 2010）。また同調査結果のまとめによると、１）オリンピック報道で女性選手は男性選手と同程度に取り上げられる。２）オリンピック以外の報道では、男性選手と比較すると不平等で劣った扱いを女性選手は受ける。３）女性選手は、オリンピック代表団の選手数に比例した報道を受ける。４）メダル獲得数に比例した報道を受ける。５）女らしさと強く結びつくスポーツやジェンダー差を強調するユニフォームを身につけるスポーツに参加する女性選手は比較的多くの報道を受ける。６）女性選手は写真において男性選手と同じように描写される。７）国のアイデンティティに歴史的に結びついたスポーツにおいてメダルを獲得した女性選手は比較的多くの報道を受けることを明らかにした（Bruce eds. 2010）。ちなみに同調査の日本の分析結果は、１）～４）、６）は同じ分析結果であり、５）については外国の女性選手への言及に同様の傾向が見られ、７）は柔道に同様の傾向が見られた（Iida　2010：234）。Bruceらの調査結果が有益な点は、主流メディアによるスポーツ報道が、普段は男性のプロスポーツばかり取り上げ、男性優位のジェンダー秩序を構築し、女性が不可視化され周縁化されていることを明らかにしたことにある。

本研究では、先行研究の知見から以下５つのRQを設け、調査結果の検証を行う。RQ１～４はBruceらの知見を使い、RQ５は日本のメディアを含め、メディアにおけるジェンダー表象で指摘される問題をRQとして設けた。先行研究の調査対象メディアは新聞等であるため単純比較はできないが、ある程度の傾向と変化を読み取ることは可能と思われる。

RQ１：女性選手と男性選手は、オリンピックチームにおける彼ら／彼女らの選手数に比例した報道を受ける。

RQ２：女性選手と男性選手は、メダル獲得数に比例した報道を受ける。

RQ３：女らしさと強く結びつくスポーツやジェンダー差を強調するユニフォームを身につけるスポーツに参加する女性選手は比較的多くの報道を受ける。

RQ４：国のアイデンティティに歴史的に結びついたスポーツおいてメダルを獲得した女性選手は比較的多くの報道を受ける。

RQ５：女性選手は男性選手と比較すると容姿、年齢といった能力以外の面でメディアの注目を浴びる傾向がある。

2. ロンドンオリンピックの概要と日本代表選手

本章では、女性選手の競技への参加と参加者数という点で平等に近づいたロンドンオリンピックの概要と、日本代表選手の参加者数と主な競技結果について述べる。

ロンドンオリンピックは、2012年７月27日～８月12日に主にロンドン都市周辺部を主会場として開催された第30回夏季オリンピックである。ロンドンでは1908年および1948年に続く史上初の通算３回目の開催であり、競技種目は302種目、参加選手の総数は10,568人であった。

ロンドンオリンピックに参加した日本代表の選手数は女性選手の方が156人(53.2%)と多く、男性選手137人（46.8%）を上回った（図表－１参照)。各競技の参加選手数を示したものが図表－２である。日本代表は出場権を獲得できなかったバスケットボールとハンドボールを除きすべての競技に参加したが、参加選手が多い競技は陸上（46人)、水泳（39人)、サッカー（36人)、体操（19人)、ホッケー（16人)、柔道（14人)、バレーボール（14人)、レスリング（13人）であった。

図表－１：ロンドンオリンピック日本代表の選手数

女　性	男　性	合　計
156人（53.2%）	137人（46.8%）	293人（100.0%）

※公益財団法人日本オリンピック委員会公式ホームページ第30回オリンピック競技大会日本選手団データより筆者が作成

図表－２：ロンドンオリンピック日本代表の競技別の選手数

競　技　名	女　性		男　性		計	
	人	%	人	%	人	%
陸上競技	18	39.1	28	60.9	46	100.0
水泳	25	64.1	14	35.9	39	100.0
サッカー	18	50.0	18	50.0	36	100.0
テニス	0	0.0	3	100.0	3	100.0
ボート	3	60.0	2	40.0	5	100.0
ホッケー	16	100.0	0	0.0	16	100.0
ボクシング	0	0.0	4	100.0	4	100.0
バレーボール・ビーチバレー	12	85.7	2	14.3	14	100.0
体操	12	63.1	7	36.8	19	100.0
バスケットボール※	－	－	－	－	－	－
レスリング	4	30.8	9	69.2	13	100.0
セーリング	4	44.4	5	55.6	9	100.0
ウエイトリフティング	4	80.0	1	20.0	5	100.0
ハンドボール※	－	－	－	－	－	－
自転車	3	33.3	6	66.7	9	100.0
卓球	3	50.0	3	50.0	6	100.0

競　技　名	女　性		男　性		計	
	人	%	人	%	人	%
馬術	1	12.5	7	87.5	8	100.0
フェンシング	5	62.5	3	37.5	8	100.0
柔道	7	50.0	7	50.0	14	100.0
ソフトボール ※	−	−	−	−	−	−
バドミントン	6	54.5	5	45.5	11	100.0
射撃	2	50.0	2	50.0	4	100.0
近代五種	2	66.7	1	33.3	3	100.0
カヌー	3	37.5	5	62.5	8	100.0
アーチェリー	3	50.0	3	50.0	6	100.0
野球　※	−	−	−	−	−	−
トライアスロン	3	60.0	2	40.0	5	100.0
テコンドー	2	100.0	0	0.0	2	100.0
合計	156	53.2	137	46.8	293	100.0

※ソフトボールと野球はロンドンオリンピックでは除外種目、バスケットボールとハンドボールは出場権を獲得できなかった種目である。

ロンドンオリンピックで日本代表選手が獲得したメダルの内訳を示したものが図表－３である。総メダル獲得数38個は、日本史上最高であり、性別で獲得数をみると男性選手21個（55.3%）、女性選手17個（44.7%）と男性選手の方が多かった。メダル獲得数の多い種目は水泳11個（銀３、銅８）、柔道６個（金１、銀２、銅３）、レスリング６個（金４、銅２）、体操３個（金１、銀２）と、参加選手が多い競技とおおむね一致している。

次章以降では、本研究の調査方法と結果について述べる。

図表－３：ロンドンオリンピック日本代表選手のメダル獲得数

メ　ダ　ル	女　性		男　性		計	
	メダル獲得数	%	メダル獲得数	%	メダル獲得数	%
金メダル	4	57.1	3	42.9	7	100.0
銀メダル	6	42.9	8	57.1	14	100.0
銅メダル	7	41.2	10	58.8	17	100.0
合計	17	44.7	21	55.3	38	100.0

3. 研究方法

本章では本研究の調査対象と調査期間、分析手法について説明を行う。

3. 1.　調査対象とした番組と調査期間

本研究は、国際テレビニュース研究会が行った2012年ロンドンオリンピックの内容分析データを使用し、オリンピック選手のジェンダー表象について再コーディングを行った[3)]。分析対象は日本のキー局で夜に放送されているニュース番組５つである（図表－４参照）。分析期間はオリンピック開始４日前の2012年７月24日からオリンピック終了４日後の８月16日までの合計24日間である。また分析対象となった各ニュース番組のニュース本数は、『NHKニュース７』が85本（15, 758秒）、『NEWS　ZERO』が64本（19, 427秒）、『NEWS23X』が73本（14, 508秒）、『NEWS Japan』＋『すぽると！』が136本（17, 110秒）、『報道ステーション』67本（20, 499秒）である。今回の元データである国際テレビニュース研究会による2012年ロンドンオリンピックの内容分析の手法や分析項目については、詳しくは（中・日吉・小林　2015a）を参照されたい。以後本研究では各番組をそれぞれ『ニュース７』、『ZERO』、『23X』、『Japan』、『報ステ』の略称で記述する。

図表－４：分析対象番組

・『NHK ニュース7』	（放送局：NHK、放送日：月曜～日曜）
・『NEWS ZERO』	（放送局：日本テレビ、放送日：平日）
・『NEWS23X』	（放送局：TBS、放送日：平日）
・『NEWS Japan』	（放送局：フジ、放送日：平日）＋『すぽると！』[4)]（放送局：フジ、放送日：平日）
・『報道ステーション』	（放送局：テレビ朝日、放送日：平日）

※番組名、放送日はロンドンオリンピック開催時のもの

3. 2.　コーディング

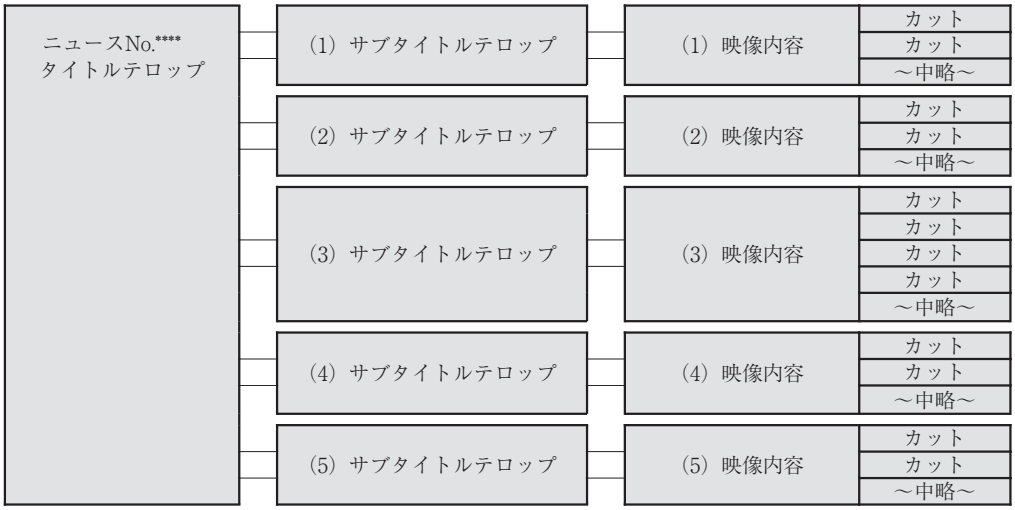
本研究はロンドンオリンピックのコーディング・データのうち、「スポーツ」に分類されたニュースの中からオリンピックニュースについての再分析を行った。再分析にあたり、図表－５に示した12項目についてコーディングを行った（詳細は「3. 3. 分析項目」を参照のこと）。

図表－５：分析項目

分析部分	分析項目名
基本項目	a. 名前
	b. 性別
	c. 国籍
	d. 競技結果
内容項目	e. プライバシー
	d. 容姿
	f. 感情・表情
	g. ジェンダー
	h. 呼称
	i. 性的対象化
	j. 国民性・地域性
	k. 身体能力

図表－６は１本のニュースの構成要素を示したものであり、図表－７・８・９は女子レスリングで金メダルを獲得した伊調馨選手と小原日登美選手について報じたニュース画像である（『報ステ』８月９日）。図表－６に沿い、ニュース１本の成り立ちを説明すると、スタジオで古舘伊知郎キャスター（またはアナウンサー）がこのニュース内容をまとめた原稿を読み上げ、テレビ画面にニュース内容を要約したタイトルテロップ「日本女子初！伊調３連覇　小原“どん底”からの金メダル」が表示される（図表－７）。次に、このニュースの詳細を説明するための最初のサブタイトルテロップ「女子レスリングで金×２“２人の女王”伊調と小原」が表示され、アナウンサー（またはキャスター）やナレーションにより女子レスリングで金メダルを獲得した伊調選手の試合について報じる（１）映像内容～（中略）が始まる。続いて画面は小原選手の試合の様子に変わり、画面には２つ目のサブタイトルテロップ「小原日登美31歳　激闘の末･･･金」が表示され、それに付随する（２）映像内容に画面が変わる。その後３つ目、４つ目、５つ目のサブタイトルテロップが表示され、それぞれに付随した（３）～（５）の映像内容へて変わっていく。このニュースは「タイトルテロップ」に５つの「サブタイトルテロップ」とそれに付随する５つの「映像内容」で構成されており、それらをまとめて「１本」のニュースとして分類し、分析を行っている。

図表－６：ニュース１本ごとの成り立ち



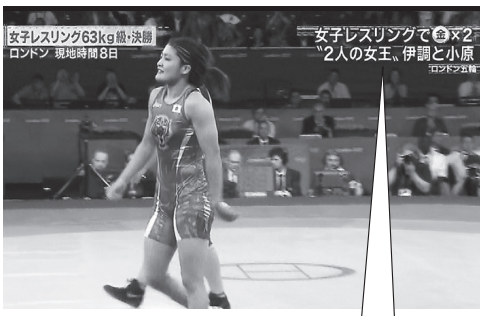
出典）中・日吉・小林　2015a

本研究の分析単位である「報道回数」とは、１本のニュースの中で主人公として取り上げられた「選手」をカウントしたものである。ただし、上述した事例のように１本のニュースで複数のオリンピック競技結果が取り上げられた場合は、それぞれの競技結果で最も焦点が当たった「選手」または「チーム」を最大10名までコーディングした。この場合は、伊調選手と小原選手をそれぞれの競技結果の主人公としてコーディングした。ただし、１本のニュース内で同一選手が同じコーディング項目で何度取り上げられても１回とカウントした。

図表－７：タイトルテロップの例

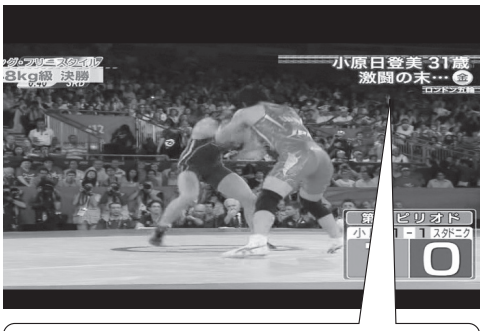
日本女子初！伊調３連覇
小原“どん底”からの金メダル

図表－８：（１）サブタイトルテロップの例



女子レスリングで金×2“２人の女王”伊調と小原

図表－９：（２）サブタイトルテロップの例



小原日登美31歳　激闘の末･･･金

※図表－７・８・９の出典は中・日吉・小林2015aである。また映像は『報ステ』８月９日のものである。

コーディングを担当したコーダーは、筆者が所属する大学の学生５人である。１人につき１番組を担当した。マニュアルに基づき十分に訓練を積んだ後、コーディングを行った。また、コーディング終了後、すべてのデータを筆者が確認し、コーディングにおける考え方や分析視点を統一し、データの信頼性向上に努めた。

3. 3.　分析項目

本節では分析項目について説明を行う。各項目は先行研究で男女の報道に差異があったとされる項目であり、今回分析項目とした。各項目について言及･提示等があった場合、該当ニュースの構成要素のうち、【発言】【ナレーション】【テロップ】【映像】のどの表現にあたるのか検討し分類をした上でコーディングを行った。

a．名前

選手の名前をコーディングする項目

b．性別

選手の性別をコーディングする項目

図表－10：選手の性別

コード	対　象　者
1　男性	男性選手
2　女性	女性選手
3　混合	男性と女性がペア、集団として上げられていた場合に入力するコード
4　不明	選手の性別が不明な場合に入力するコード

c．国籍

選手の国籍をコーディングする項目

d．競技結果

選手の競技結果についてコーディングする項目

図表－11：競技結果

コード	競技結果
101	1位
102	2位
103	3位
104	4位
105	5位
106	6位
107	7位
108	8位
109	ベスト16以上（ベスト4、ベスト8、ベスト16、決勝、準決勝、準準決勝等）
110	予選、練習
111	その他

e．プライバシー

オリンピックニュースで取り上げられた選手のプライバシーに関する言及・提示についてコーディングする項目である。

図表－12：プライバシー

コード	プライバシーの内容
1　過去や未来	選手自身の過去や未来について
2　性格	選手の性格について
3　恋愛	選手の恋愛／恋人
4　結婚	選手の結婚
5　パートナー	選手の家庭／家族等（パートナーについて）
6　子ども	選手の家庭／家族等（子どもについて）
7　親・兄弟姉妹	選手の家庭／家族等（親・兄弟姉妹について）
8　同僚	選手の仕事／同僚について
9　友人	選手の友人について
10　恩師	選手の恩師について
11　コーチ・監督	選手のコーチ・監督
12　その他	その他

ｆ．選手の容姿

当該ニュース内容や映像で主だった選手の容姿への言及・発言等があった場合、その内容についてコーディングする項目である。

図表－13：容姿

コード	内　　容
1　美しさ	選手の姿形、身なりや顔形について美しい、かっこいい、かわいいなどポジティブな表現
2　力強さ	選手の姿形、身なりや顔形、またはスポーツする身体について力強さやスピード、攻撃性などに対するポジティブな表現
3　その他	１と２以外で選手の容姿に関する表現

ｇ．感情・表情

ニュースの中で、選手が表す感情や表情についてコーディングする項目である。

図表－14：感情・表情

項　　目	内　　容
1　喜び	選手の笑顔、幸福、楽しい、幸せそうな表情・様子等
2　悲しみ	選手の悲しみ、泣く、つらそうな表情・様子等
3　怒り	選手の怒り、悔しそうな表情・様子等
4　リラックス	選手の普段とかわらない様子、落ち着いている様子
5　気迫	選手の闘志みなぎる様、情熱や気迫、やる気に満ちた表情・様子等
6　緊張	選手の緊張した表情・様子等
7　その他	１～６にあてはまらないもの

ｈ．ジェンダー

ニュースの中で選手のジェンダー（「男らしさ」「女らしさ」）について言及や提示があった場合、その内容についてコーディングする項目である。

ｉ．選手の呼称

ニュースの中で選手を本名以外で言及・提示した場合にコーディングする項目である。

ｊ．選手の性的対象化

ニュースの中で選手を複雑な要素を持ったひとりの人間としてとらえるのではなく、男性あるいは女性の欲望の対象として扱った場合、コーディングする項目である。

ｋ．国民性・地域性への言及

選手の出身国・出場地域の「国民性」「地域性」についての言及・映像等の有無についてコーディングする項目である。

Ⅰ．選手の身体能力

ニュースの中で取り上げられた選手の身体能力や競技技術の高さについて言及があった場合や、それに関する映像が取り上げられた際にコーディングする項目である。

図表－15：身体能力

項　　目	内　　容
1　身体ポジティブ表現	選手の身体についてのポジティブな表現　例）手足が長い
2　身体ネガティブ表現	選手の身体についてのネガティブな表現　例）身長が低い
3　筋力	選手の筋力（体を鍛える、力強さも含む）
4　持久力	選手の持久力（スタミナ、タフさ）
5　敏捷性	選手の敏捷性（平衡性、バランス感覚も含む）
6　柔軟性	選手の柔軟性
7　スピード	選手のスピード、速さ
8　攻撃力	選手の攻撃力
9　守備力	選手の守備力
10　技術の高さ	選手の競技に関する技術の高さ
11　その他	その他

4. 分析結果

本章では、ロンドンオリンピックのコーディング・データを元に、選手のジェンダーに焦点を当てコーディングを行った結果を示す。分析単位は報道回数である。

4. 1. 選手の「国籍」と「性別」のクロス集計の結果

次に、選手の「国籍」と「性別」毎に報道回数を合計したものが図表－16である。ロンドンオリンピック開催期間中のニュースの約９割は日本選手の報道で占められ、その内日本の女性選手が424回（48.8％）と最も多く取り上げられていた。一方他国の選手についての報道はわずか76回（9.0％）にとどまった。このことから、ロンドンオリンピック開催期間中のオリンピックニュースは、日本選手を取り上げた内容で席巻されていたことが明らかとなった。

図表－16：選手の「国籍」×選手の「性別」

国　籍	女　性	男　性	混　合	計
日　　本	424(48.8％)	356(41.0％)	12(1.4％)	772(91.2％)
そ　の　他	44(5.1％)	31(3.6％)	1 (0.1％)	76(8.8％)
合　計	464(53.9％)	387(44.6％)	13(1.5％)	848(100.0％)

4. 2. 報道された「競技」と「性別」のクロス集計の結果

図表－17は、オリンピック競技別に分類した「ニュースの分野②」と、選手の「性別」を報道回数毎にクロス集計した結果を百分率で示したものである。また、参考として日本選手が獲得したメダル数を「性別」毎に示した。

報道された「競技」は、日本がメダルを獲得したニュースで、全体の81.6％を占めていた。「性別」毎に上位５つをみてみると、男性選手１位は「水泳」（10.2％）、２位「サッカー」（8.1％）、３位「陸上競技」（5.3％）と「柔道」（5.3％）、５位「体操」（5.0％）であった。女性選手１位は「サッカー」（12.9％）、２位「レスリング」（7.0％）、３位「卓球」（6.8％）、４位「水泳」（6.0％）、５位「柔道」（5.9％）であった。他方、まったくニュースで取り上げられなかった競技は「908　ボート」、「915　セーリング」、「918　自転車」、「926　近代五種」、「927　カヌー」、「931　テコンドー」と多くあった。集中して取り上げられた競技は、男女ともにメダル獲得競技、あるいはプロスポーツで人気のある競技であったといえよう。

図表－17：「競技」（「ニュースの分野②」）×選手の「性別」

競　技　名	女　性	男　性	混　合	計	日本のメダル獲得数	
					女　性	男　性
901 開閉会式	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
902 その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
903 ミックス	0.0%	0.0%	0.8%	0.8%	－	－
904 陸上競技	3.8%	5.3%	0.0%	9.1%	－	1 個
905 水泳	6.0%	10.2%	0.2%	16.5%	5 個	6 個
906 サッカー	12.9%	8.1%	0.0%	21.0%	1 個	－
907 テニス	0.0%	1.2%	0.0%	1.2%	－	－
908 ボート	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
909 ホッケー	1.0%	0.0%	0.0%	1.0%	－	－
910 ボクシング	0.0%	2.7%	0.0%	2.7%	－	2 個
911 バレーボール・ビーチバレー	3.8%	0.0%	0.0%	3.8%	1 個	－
912 体操	1.2%	5.0%	0.0%	6.2%	－	3 個
913 バスケットボール	1.0%	0.0%	0.0%	1.0%	－	－
914 レスリング	7.0%	1.4%	0.0%	8.4%	3 個	3 個
915 セーリング	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
916 ウエイトリフティング	0.7%	1.0%	0.0%	1.7%	1 個	－
917 ハンドボール	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
918 自転車	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
919 卓球	6.8%	0.7%	1.0	8.5%	1 個	－
920 馬術	1.0%	2.0%	0.0%	3.0%	－	－
921 フェンシング	0.0%	2.1%	0.0%	2.1%	－	1 個
922 柔道	5.9%	5.3%	0.1%	11.4%	3 個	4 個
923 ソフトボール						
924 バドミントン	4.7%	0.4%	0.0%	5.1%	1 個	－
925 射撃	0.1%	1.0%	0.0%	1.1%	－	－
926 近代五種	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
927 カヌー	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
928 アーチェリー	1.2%	0.6%	0.0%	1.8%	1 個	1 個
929 野球						
930 トライアスロン	0.4%	0.0%	0.0%	0.4%	－	－
931 テコンドー	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－
合計	55.2%	43.5%	1.3%	100.0%	17個	21個

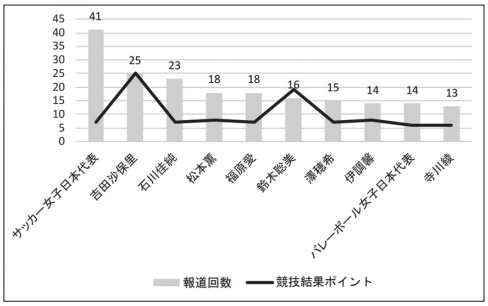
4. 3. 報道回数トップ10と順位ポイントの結果

図表－18・19は、女性・男性選手の報道回数トップ10を縦棒グラフに、各選手の競技結果を合計したものを折れ線グラフで示したものである[5)]。女性選手は全てメダリストであり、その内金メダリストが３人いる。男性選手は「サッカー男子日本代表」が４位、「錦織圭」選手が５位、その他は全てメダリストである。「ウサイン・ボルト」選手（陸上・ジャマイカ）だけ

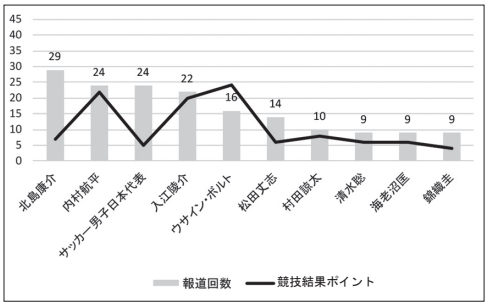
が日本人以外の選手として報道されていた。男性・女性選手の報道回数を比較すると、全体的に女性選手の方が１人あたりの報道回数が多いことがわかる。また、男女共通した特徴として、①メダル獲得が期待されるまたはメダルを獲得した選手（チーム）は報道回数が多い。②同一選手が複数種目で入賞している場合、報道回数が多いといえよう。

しかし、男性選手の報道回数１位の「北島康介」選手（報道回数29回、競技結果ポイント７）や３位の「サッカー男子日本代表」（報道回数24回、競技結果ポイント５）は、メダル獲得を期待されながら結果が振るわなかったため報道回数のみが多い結果となったのであろう。同様に女性選手１位の「サッカー女子日本代表」（報道回数41回、競技結果ポイント７）は、金メダル獲得が期待されたが、銀メダルであったこと、サッカー１種目のみの順位結果であるため報道回数と順位に乖離が生じたと思われる。また、メダル獲得数の多い種目は水泳11個（男性６個、女性５個）、柔道６個（男性４個、女性３個）、レスリング６個（男性３個、女性３個）、体操３個（男性３個、女性０個）（図表－３）であったことからすると、卓球やバレーボールの報道回数は多いといえよう。

図表－18：女性選手の報道回数×競技結果ポイント



図表－19：男性選手の報道回数×競技結果ポイント

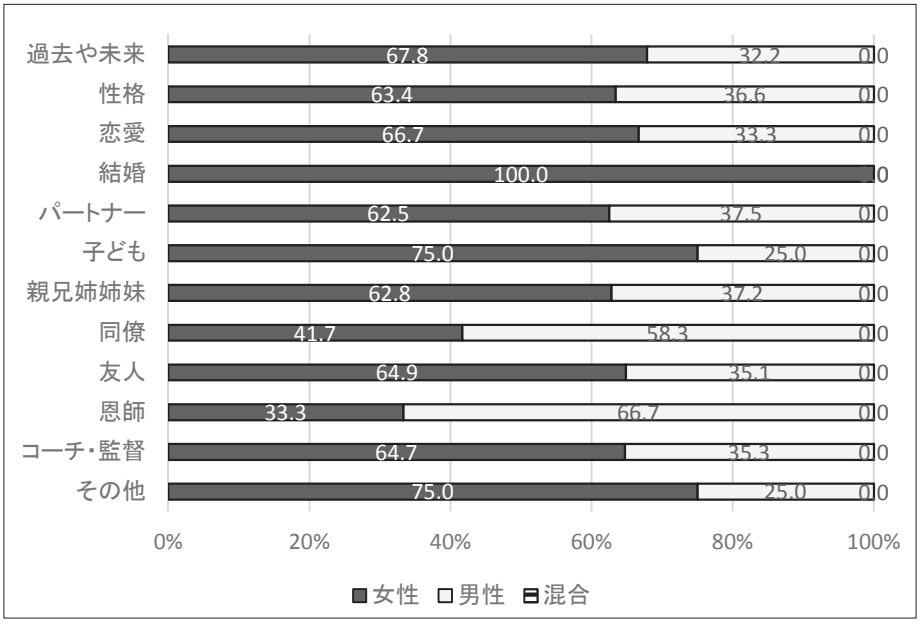


4. 4. 選手の「プライバシー」と「性別」のクロス集計の結果

図表－20は、選手の「プライバシー」について【映像】【発言】【テロップ】【ナレーション】でそれぞれ提示された内容を項目毎に「性別」でクロス集計したものである。なお、百分率は「性別」で示したものである。選手の「プライバシー」に関する12項目を合計すると、女性選手は「プライバシー」について274回、男性選手は142回取り上げられていた。各項目で女性選手が男性選手よりも多く提示されていたのは「過去や未来」（78回、67.8％）、「性格」（26回、63.4％）、「恋愛」（４回、66.7％）、「結婚」（２回、100.0％）「パートナー」（５回、62.5％）、「子ども」（６回、75.0％）、「親兄姉」（49回、62.8％）、「友人」（24回、64.9％）、「コーチ・監督」（11回、64.7％）、「その他」（60回、75.0％）についてであった。男性選手が多く提示されていたのは「同僚」（７回、58.3％）と「恩師」（８回、66.7％）のみであった。

選手の幼少時から将来についての情報や家族の応援・支え、病気・怪我、苦労等に関する情報は男女双方で取り上げられるが、女性選手の方が多く提示されていた。特に「結婚」「子ども」「その他」については女性選手で７割を超え、中でも「その他」に分類された内容は、女性選手の場合、好きな食べ物や好きな芸能人、趣味等が取り上げられていた。

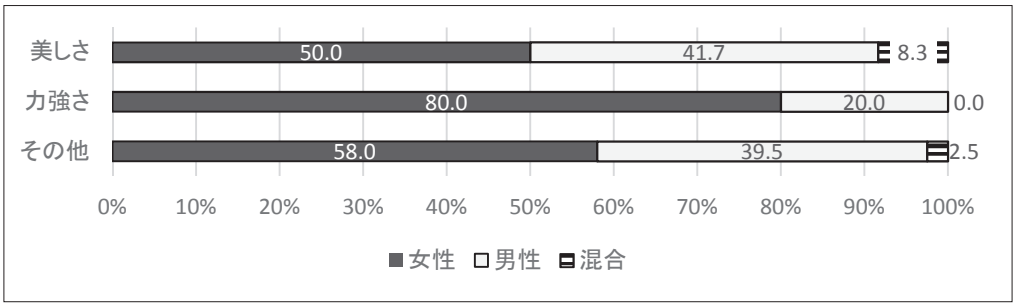
図表－20：選手の「プライバシー」×「性別」



4. 5. 選手の「容姿」と「性別」のクロス集計の結果

図表－21は、選手の「容姿」についてニュース内で【映像】【発言】【テロップ】【ナレーション】で提示されていた内容を項目毎に「性別」でクロス集計した結果を百分率で示したものである。各項目で女性選手が男性選手よりも多く提示されていたのは「美しさ」(12回、50.0％)、「力強さ」(20回、80.0％）について多く表象されていた。選手の「美しさ」については、男女ともに顔の「美しさ」への言及が多いが、男性選手はスポーツする身体への賞賛も見受けられた。「美しさ」について最も取り上げられたのは陸上のやり投げに出場したパラグアイのレリン・フランコ選手（３回）であった。また、諸外国の美しい女性選手を取り上げた特集もあった（「REAL VENUS」『Japan』８月３日)。「力強さ」について最も多く表象されていたのは柔道金メダリストの松本薫選手（９回）であった。容姿への言及は男女ともに少ないが、女性選手の方が、容姿に関する言及が取り上げられやすいことが明らかとなった。

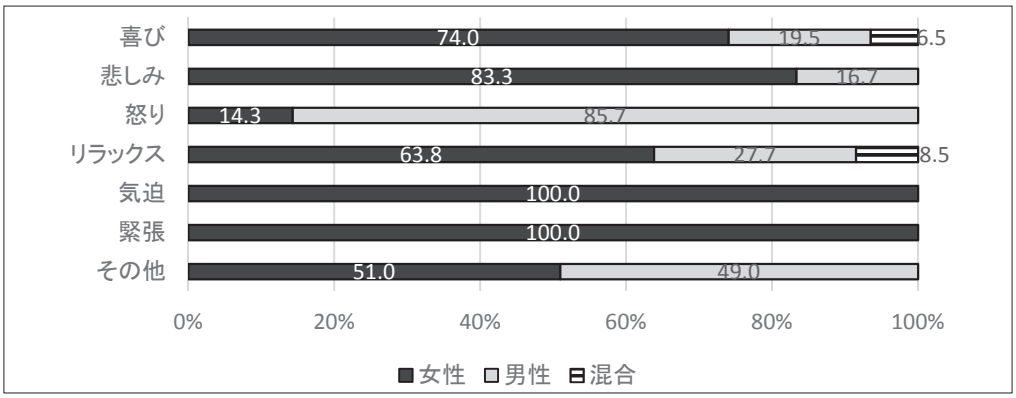
図表－21：選手の「容姿」×「性別」



4. 6. 選手の「感情・表情」と「性別」のクロス集計の結果

図表－22は選手の「感情･表情」に関する表象について【映像】【発言】【テロップ】【ナレーション】で提示された内容を項目毎に「性別」でクロス集計した結果を百分率で示したものである。各項目で女性選手は「気迫」（100.0%）「緊張」（100.0%）「悲しみ」（83.3%）「喜び」（74.0%）「リラックス」（63.8%）において男性選手よりも多く提示されていた。男性選手が唯一女性選手よりも多く描かれていたのは「怒り」（85.7%）であった。女性選手は男性選手と比べニュースの中で怒り以外の多様な「感情・表情」について描かれていることが明らかとなった。

図表－22：選手の「感情・表情」×「性別」

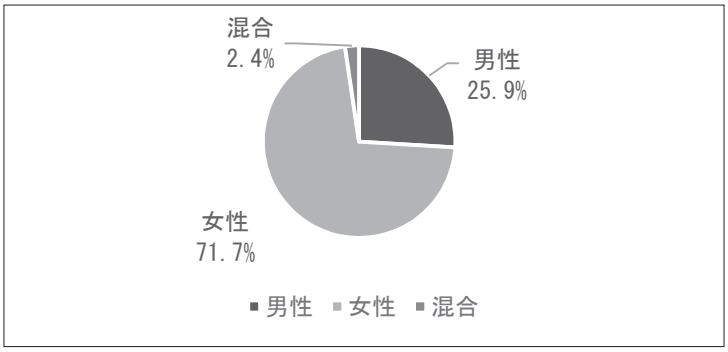


4. 7. 選手の「呼称」と「性別」のクロス集計の結果

図表－23は、ニュース内【映像】【発言】【テロップ】【ナレーション】で提示された選手やチームに対する正式名称以外の「呼称」についてまとめ、「性別」毎に合計した結果を示したものである。女性選手は152回（71.7%）、男性選手は55回（25.9%）愛称等で呼ばれていたこ

とが明らかとなった。

図表－23：選手の「呼称」×「性別」



図表－24は正式名称以外で報道された女性選手トップ５である。最も使用された愛称は「なでしこジャパン」「なでしこ」（63回）のサッカー女子日本代表であった。１位、２位、４位、５位はすべてメダル獲得者であり、特に２位の松本薫選手は試合前の気迫に満ちた表情と攻撃的なプレイスタイルから「野生児」「野獣」等と紹介されることが多かった。３位の陸上フルマラソン女子日本代表の福士加代子選手、吉川美香選手、新谷仁美選手は「三人娘」と称され、３人１組でレース前から取り上げられていたが、メダル獲得はならなかった。

女性選手の「呼称」の傾向は、第一に選手個人よりチームやペアとして扱われる場合に頻出すること、第二に、メダル獲得が期待されるチームやペアまたは選手が愛称等で呼ばれること、第三に、子ども扱いがみられることである。

図表－24：女性選手の「呼称」

順　位	名　　前	呼　　称	回　数
１位	サッカー女子日本代表	なでしこジャパン なでしこ	63
２位	松本薫	野生児、野獣、 アサシン、殺し屋 不思議系 メダルの狼	13
３位	福士加代子、吉川美香、新谷仁美	女子／マラソン／日本／三人娘 三人娘	9
４位	藤井瑞希・垣岩令佳ペア	フジカキ（ペア）	7
５位	バレーボール女子日本代表	真鍋／火の鳥ジャパン	7

図表－25は正式名称以外で報道されていた男性選手トップ５を示したものである。１位の体操の内村航平選手は男子個人総合で金メダル、男子団体で銀メダル、男子種目別ゆかで銀メダルを獲得し「日本のエース」「世界王者」「スーパースター」等と称された。内村選手は北京オリンピック体操競技で銀メダルを２個獲得しており、過去の実績が評価されこのような呼称となったと思われる。同様の実績を持っていた５位の水泳の北島康介選手も「競泳のエース」「世界のKITAJIMA」等と称されたが、ロンドンオリンピックでは男子４×100mメドレーリレーでの銀メダルにとどまった。２位から４位はサッカー男子日本代表である永井謙佑選手、サッカー男子日本代表、大津祐樹選手であり、チームとしての結果は４位であった。永井選手と大津選手は試合で得点を上げた選手である。永井選手は身体能力や技量を評価され「スピードスター」「頼れる男」等と称され、大津選手は茶髪で左耳にピアスをしている外見から「チャラ男」と呼ばれていることが紹介され、同時に「勝利への立役者」等と言われた。サッカー男子日本代表の「関塚ジャパン」は、監督の関塚隆氏にちなんだ名称であり、その他「若き侍」とも称された。

上記から男性選手の「呼称」の傾向は、第一に選手個人に対しての呼称であること、第二に選手の強さや技量にちなんだ呼称が多いといえよう。

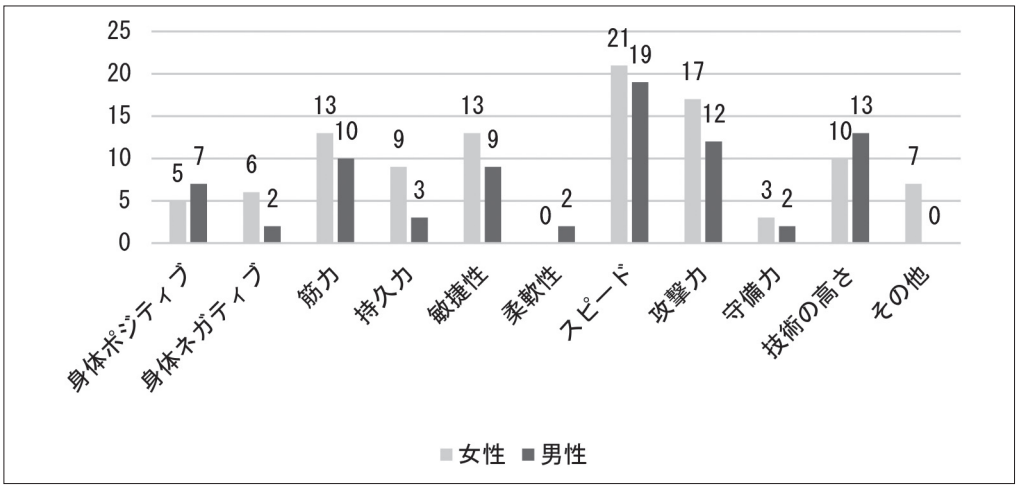
図表－25：男性選手の「呼称」

順　位	名　　前	呼　　称	回　数
１位	内村航平	体操（の）／日本のエース 体操／世界王者 スーパースター	8
２位	永井謙佑	日本の／スピードスター 頼れる男 日本代表を引っ張る原動力 謙佑 猿	7
３位	サッカー男子日本代表	関塚ジャパン 若き侍	6
４位	大津祐樹	チャラ男 勝利への立役者 歴史的快挙に導いた男 持っている男	5
５位	北島康介	競泳のエース エース北島康介 世界のKITAJIMA カッパ	4

4. 8. 選手の「身体能力」と「性別」のクロス集計の結果

日本以外の選手の「身体能力」や競技技術等について【映像】【発言】【テロップ】【ナレーション】で言及・映像があった内容について「性別」毎にまとめたものが図表－26である[6)]。女性選手は合計で104回、男性選手は合計79回身体能力について触れられていた。女性選手で取り上げられた身体能力の１位は「スピード」（21回）、２位「攻撃力」（17回）、３位「筋力」「敏捷性」（13回）であった。男性選手の１位は「スピード」（19回）、２位「技術の高さ」（13回）、３位「攻撃力」（12回）であった。女性選手に対する「身体ネガティブ表現」（６回）は男性選手（２回）の３倍の頻度であった。その内容をみてみるとサッカー女子の「FIFAランキングは３位と最も高いが平均身長は最も低いなでしこは強化試合でフランスに身長の低さでセットプレーからゴールを奪われた」（『ZERO』７月30日、１回）。またサッカー女子ブラジルと比較して「平均身長９センチ劣る日本」（『ニュース７』８月８日、２回）、バレーボール女子ブラジル代表のシェイラ･カストロ選手に対して「最高到達点は３mとそれほど高くないシェイラ。しかし、飛んでからのスピードはまさに電光石火」（『Japan』８月９日、３回）とすべて女子選手、あるいはチームに対しての言及であり、男性選手と比較して低質という内容ではなかった。

図表－26：選手の身体能力（単位：報道回数）



4. 9. その他

「ジェンダー」の中でも性別役割に関連した表現で、射撃の中山由起枝選手がシングルマザーとして子育てと競技生活を悩みながら両立させていることを特集したニュースがあった（『ニュース７』８月５日）。またバレーボール女子日本代表の大友愛選手に対し「ママさんプ

レーヤー」（『Japan』８月８日）と呼び、紹介する場面があった。

「性的対象化」については水泳の寺川綾選手、加藤ゆか選手、上田春佳選手に対し「一番女子力の高い人は？」「一番先に結婚しそうな人は？」「一番モテる人は？」等の質問がインタビューで一部認められた。さらにこのインタビューでは「一番イケメンが好きな人は？」という質問が寺川選手、加藤選手、上田選手に対し行われ、３選手はそれぞれ好みのタイプの男性選手の容姿や性格について語る特集があった（「競泳メダリスト生出演その素顔に迫る！」『Japan』８月14日）。特に寺川選手は「美少女スイマー」（『報ステ』７月31日、『Japan』８月14日）として取り上げられているが、別のニュースでは優れた水泳選手（銅メダリスト）としても表象されていた。

5. RQの検証と考察

本章では分析結果からRQの検証を行い、ロンドンオリンピック開催期間中のテレビニュースで取り上げられた選手のジェンダー表象の考察を行う。

5. 1. RQの検証

本節ではロンドンオリンピック開催期間中の日本のテレビニュースの分析結果を使い先行研究から設けた５つのRQの検証を行い、女性選手のジェンダー表象の傾向を把握する。

・RQ１：女性選手と男性選手は、選手数に比例した報道を受ける

ニュースに登場する選手の性別割合（女性53.9％、男性44.6％）（図表－16）は、日本代表選手の性別割合に比例した（女性53.2％、男性46.8％）（図表－１）報道回数であった。よってRQ１は支持された。

・RQ２：女性選手と男性選手は、メダル獲得数に比例した報道を受ける

日本の女性選手によるメダル獲得数（17個、44.7％）と男性選手のメダル獲得数（21個、55.3％）（図表－３）に対し、メダルを獲得した競技のテレビニュースの報道回数の合計は女性選手（49.0％）の方が男性選手（32.6％）より多く（図表－17）、RQ２は棄却された。

・RQ３：女らしさと強く結びつくスポーツやジェンダー差を強調するユニフォームを身につけるスポーツに参加する女性選手は比較的多くの報道を受ける

梅津は、女性にふさわしいスポーツの一例として、シンクロナイズドスイミング、新体操、テニスをあげ、髪や顔をメイクアップし装飾品を身に着け、ユニフォームのデザインや色彩に

「女性らしさ」（梅津 2004：111）を肯定する女性選手たちの登場と変貌について述べている。梅津の分析を基にRQ3についてより詳細に定義を行うと、女性にふさわしいスポーツはシンクロナイズドスイミング、新体操、テニスであり、体の線を強調するユニフォームを身につける競技として、水泳・シンクロナイズドスイミング、レスリング、ビーチバレー、新体操があげられる。また、美しい容姿や化粧やファッションがおしゃれな選手が女性らしさと結びつく女性選手といえよう。

このような前提のもと女性選手の報道回数トップ10をみてみると、体の線を強調するユニフォームの着用ということではレスリングや水泳が該当し、２位の吉田沙保里選手、６位の鈴木聡美選手、８位の伊調馨選手、10位の寺川綾選手となる（図表－18）。また、美しい容姿の選手として「美少女スイマー」として取り上げられていた10位の寺川選手が該当する。これらの女性選手は多くの報道を受けているが、メダリストでもあるため、RQ3については、一部支持といえよう。RQ３については、報道回数の比較だけではなく、プライバシーや容姿等も含めた質的な分析が必要と思われる。

・RQ４：国のアイデンティティに歴史的に結びついたスポーツおいてメダルを獲得した女性選手は比較的多くの報道を受ける

RQ４に該当するスポーツは日本では柔道といえる。女性選手の報道回数トップ10のうち、柔道で金メダルを獲得した松本薫選手は４位（図表－18）、「競技」別で「柔道」（5.9％）は５位であった。（図表－17）。ゆえにRQ４は支持された。

・RQ５：女性選手は男性選手と比較すると容姿、年齢といった能力以外の面でメディアの注目を浴びる傾向がある。

RQ５については、女性選手（274回）は男性選手（142回）と比較してプライバシーが多く取り上げられ、「美しさ」「力強さ」を含めた「容姿」や多様な「感情・表情」が注目を集めていた（図表－20・21・22）。

同様の傾向は「呼称」においても認められる。男性選手は競技実績が評価された呼称が多くを占めるのに対し、女性選手の呼称は能力以外の特徴による愛称が見受けられた（図表－23・24・25）。

しかし、日本以外の選手の身体能力や競技技術等への言及・映像は、女性選手（104回）の方が多く、男性選手（79回）よりも多かった（図表－26）。女性選手への言及・映像のうち、６回は「身体へのネガティブな表現」があったが、それらは対戦相手との比較が多く、男性選手と比較して低質であるという文脈ではなかった。この項目には外国メディアが日本選手について言及している場合が含まれているとはいえ限定的であるため、女性選手全体とはいえない

が、女性選手は身体能力や競技技術を賞賛される一方で、「容姿」や「感情・表情」、「呼称」について男性選手よりもメディアより注目を浴びていた。したがって、RQ５は一部支持された。

上記からRQ１～５の検証結果をまとめると、ロンドンオリンピックのテレビニュースで表象された女性選手はメダル獲得数に比して男性選手よりも多く取り上げられた。しかし参加者数は女性選手の方が多かった。その点では参加した選手の性別割合に即して報じられたともいえる。女性選手の描き方は、男性選手に比して「プライバシー」、「容姿」や「感情・表情」に注目され、選手の能力以外の特徴に焦点をあてた愛称も見受けられた。しかし、その一方で諸外国の女性選手の身体能力や技術の高さを賞賛する表象は、男性選手よりも多く見られた。

5. 2. 考察

報道される選手の国籍は日本代表選手で約９割を占めており（図表－16）、ニュースで取り上げられた競技結果はメダルを獲得した競技で約８割を占めていた（図表－17）という偏りがあった。ロンドンオリンピック開催期間中のテレビニュース報道の結果（中・日吉・小林2015a）をふまえると、自国のメダルを獲得した競技結果に特化したオリンピックニュース内容であったといえよう。

ロンドンオリンピック日本代表のメダリストは男性選手の方が多かった。しかし報道回数はメダリストが少ない女性選手の方が多かった。この点については、メダル獲得が期待された男性選手の成績が振るわなかった影響もあるため、この結果をもって性別による報道格差がなくなったと指摘することは早急である。しかし、オリンピック期間中、女性選手はさまざまな要因によって注目を浴び、男性選手と同等、あるいはそれ以上にニュース・バリューが高かったということはいえよう。

オリンピック選手の表象については、女性選手の「プライバシー」、「容姿」、「感情・表情」についての提示が男性選手と比較すると多くあり、能力以外の点に注目した愛称も見受けられた。また、女性選手を子ども扱いした「（〇〇）三人娘」（『23X』８月７、８日、『Japan』７月24、26、27、30日、８月２、８日）、「〇〇ちゃん」（『報ステ』８月８日）、男性選手を標準・基準とした「スカートをはいたペレ」（『ZERO』８月３日、『Japan』８月２日）、「女ジダン」（『23X』８月６日）という表現があった。これらの点に関しては、女性選手に対するジェンダー・バイアスが残っているといえよう。

しかし、女性選手の技術や身体能力は素晴らしいものとして評価されており、男性選手と比較して低質という言及はなかった。したがってオリンピックに参加する女性選手に対するジェンダー・バイアスは、技術の高さや身体能力の点で無くなりつつあると思われる。

米国のインターネットメディアの解釈は従来の「pretty or powerful」から「pretty and powerful」という言説に変化している（Bruce 2015）ことが指摘されている。日本においても外国の女性選手の身体能力や技術の高さ、美しさ等についての表象は同時に存在していた。例えばレスリングでオリンピック３連覇を達成した吉田沙保里選手は「霊長類最強の女性」（『ZERO』８月10日）と称される一方で、かっこよさ、美しさについても言及されていた。また水泳の銅メダリスト寺川綾選手も「美少女スイマー」（『報ステ』７月31日、『Japan』８月14日）と取り上げられながら、競技技術や身体能力の高さについて評価される内容が見受けられた。これらは日本の主流メディアの１つであるテレビニュースにおける、女性選手の新たなメディア表象、あるいは多様性の現れともいえよう。しかし金メダルを獲得した柔道の松本薫選手に代表されるように「気迫」に満ちた「感情・表情」が注目を集めており（図表－18・24）、こちらは従来の「pretty or powerful」のメディア表象といえよう。急いで断れば、オリンピックのテレビニュースのジェンダー分析は日本の先行研究が少ないため、他のオリンピックの研究結果と単純に比較することはできない。ゆえに、国際テレビニュース研究会が保有する北京やリオオリンピックのニュース分析を行い、日本のテレビニュースのジェンダー秩序を明らかにすることが今後の課題である。また、男性選手やセクシャル・マイノリティである選手のジェンダー表象について分析を行い、日本のテレビニュースにおけるスポーツ選手のジェンダー秩序を明らかにしていきたい。

注

１）「ブライトン宣言」は1994年にイギリスのブライトンで開催された第１回世界女性スポーツ会議において採択された。この宣言は、スポーツにおける男女平等実現を図る10の原則――１）社会とスポーツにおける公正と平等　２）施設整備　３）学校とジュニア・スポーツ　４）参加促進　５）スポーツの高度なパフォーマンス　６）スポーツにおけるリーダーシップ　７）教育、トレーニングと能力開発　８）スポーツ情報と研究　９）資源　10）国内及び国際協力――から成る。国際オリンピック委員会（IOC）や政府、国内のオリンピック委員会がこの宣言に同意し署名している。

２）CiNiiで「オリンピック　メディア　女性」のキーワードで論文検索を行った結果、10件がヒットした。そのうち最も古い論文の出版年は2001年であった。同様のキーワードで図書・雑誌検索を行った結果は０件であった。

３）国際テレビニュース研究会は、2012年ロンドンオリンピックのテレビニュース番組のデータ（2012年７月24日～８月16日）を保有している。筆者は国際テレビニュース研究会に2004年から参加し、ロンドンオリンピックのテレビニュース内容分析調査に従事しているため

それらのデータを利用した。詳しくは中・日吉・小林2015b参照のこと。

４）「NEWS　Japan」と「すぽると！」はコンプレックス枠を形成しているため、２番組を１つの番組として扱い分析対象とした。

５）選手の競技結果は以下のようなルールでポイント化し、合計した。１位：８点、２位：７点、３位：６点、４位：５点、５位：４点、６位：３点、７位：２点、８位：１点、その他：０点。同一選手が複数種目で入賞している場合、入賞した結果をすべて合計した。

６）選手の身体能力への言及の中には性別分類「３　混合」で合計３回触れられていたが、この表では除外した。

謝　辞

本研究は、以下の機関の研究助成を得て行われました。また、本研究は大勢のコーダーの協力により内容分析を行いました。本研究に協力いただいたすべての方のお名前をあげることはできませんが、ここに謝意を表します。

・日本学術振興協会　科学研究費補助金　基盤研究（C）課題番号：25380666
　研究課題名：ロンドン五輪報道をめぐる国際ニュース・フレームの分析：北京五輪との比較から

・第10回鈴木みどりメディア・リテラシー研究基金
　研究課題名：五輪報道のジェンダー表象～北京、ロンドン、リオ・デ・ジャネイロの比較を通じて～

参考資料

阿部潔，2008,『スポーツの魅惑とメディアの誘惑　身体／国家のカルチュラル･スタディーズ』世界思想社.

Bruce, Toni, Hovden, Jorid and Markula Pirkko ed., 2010, Sports Women at the *Olympics: A Global Analysis of Newspaper Coverage,* Sense Publisheres.

Bruce, Toni, 2015, “New Rules for New Times: Sportswomen and Media Representaion in the Third Wave,” *SEX ROLES A Jounal of Research,* vol.73 (3/4):1-16.

Hall, Ann, 1996, *Feminism and Sporting Bodies: Essays on theory and practice,* Human Kinetics Publishers（＝2001,　飯田貴子・吉川康夫監訳『フェミニズム・スポーツ・身体』世界思想社）.

平川澄子，2009,「スポーツメディアにあらわれるヒロイン」『体育の科学』59(9)：609-613.

日吉昭彦，2015,「Ⅱ　ロンドンオリンピックをめぐる英国報道の背景」『平成25～27年科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書　ロンドンオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道　北京オリンピック開催期間におけるテレビニュース報道との比較を通して』国際テレビニュース研究会：7-20.

飯田貴子，2002,「第４章　メディアスポーツとフェミニズム」橋本純一編，『現代メディアスポーツ論』世界思想社：71-90.

――――，2003,「新聞報道における女性競技者のジェンダー化――菅原教子から楢崎教子へ」『スポーツとジェンダー研究』1:4-14.

――――，2004,「第２章第２節　スポーツ･メディアの現状――テレビスポーツのジェンダー分析」飯田貴子・井谷惠子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』：80-90.

――――，2005,「オーディエンスの多声性とジェンダー対抗的自己形成――女性競技者の新聞報道分析」『スポーツとジェンダー研究』3:4-17.

――――，2007,「ジェンダー視点から検証したアテネオリンピック期間中の新聞報道」『スポーツとジェンダー研究』5:31-44.

――――，2008,「スポーツジャーナリズムにおける『女性』の不在――デスクへの調査から見えてくるもの」『スポーツとジェンダー研究』6:15-29.

Iida, Takako, 2010, 17. Japan Japanese Case study: The Gender Difference Highlighted in Coverage of Foreign Athletes, Bruce, Toni, Hovden, Jorid and Markula Pirkko ed., , *Sports Women at the Olympics: A Global Analysis of Newspaper Coverage,* Sense Publisheres:225-236.

伊藤公雄，1999,「スポーツとジェンダー」井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』世界思想社：95-107.

女性スポーツ研究センター，2017,「女性とスポーツの歴史」(2017年３月７日取得, http://www.juntendo.ac.jp/athletes/history/brighton.html).

神原直幸，2001,『メディアスポーツの視点』学文社.

Kennedy, Eileen and Hills, Laura, 2009, *SPORT, MEDIA AND SOCCIETY,* Berg.

公益財団法人日本オリンピック委員会，2012，公益財団法人日本オリンピック委員会ホームページ，（2016年９月９日取得，　http://www.joc.or.jp/games/olympic/london/).

公益社団法人日本オリンピック委員会，2017,「オリンピックの歴史　2　近代オリンピックのはじまり」(2017年２月22日取得，http://www.joc.or.jp/column/olympic/history/002.html).

小玉美意子ほか，2006,「国際テレビニュース比較研究2004 ――アメリカ・日本・イギリス・ブラジル（内容分析編）」『ソシオロジスト』８号：171－266.

――――ほか，2012,『平成20年度～22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報

告書　北京オリンピック報道　テレビニュースは何を伝え、視聴者の対中国意識はどう変化したか』国際テレビニュース研究会.

小林直美，2008,「第Ⅳ章　何をどう調べるか？－調査の目的と設計」小玉美意子編著，『テレビニュースの解剖学　映像時代のメディア・リテラシー』新曜社：56－69.

――――，2016,「北京・ロンドンオリンピック開会式前後のニュース・フレーム～日本のテレビニュース報道の内容分析～」『山形大学紀要（社会科学)』第47巻第１号：35－67.

Lenskyj, Jefferson, 2008, *Olympic Industry Resistance: Challenging Olympic Power and Propaganda,* State University of New York Press.

Markula, Pirkko ed., 2009, *Olympic Women and the Media: International Perspectives,* Palgrave Macmillan.

中　正樹，2009,「Ⅵ　北京オリンピック開催期間におけるテレビニュース内容分析１～ニュース内容の量的分析～」『武蔵大学　総合研究所紀要』第18号：57-67.

――――・日吉昭彦・小林直美，2015a,「ロンドンオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道に関する内容分析」『ソシオロジスト』No. 17：147-182.

――――・日吉昭彦・小林直美，2015b,『平成25～27年科学研究費補助金基盤研究C研究成果報告書　ロンドンオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道　北京オリンピック開催期間におけるテレビニュース報道との比較を通して』国際テレビニュース研究会.

來田享子，2004a,「スポーツへの女性の参入」飯田貴子･井谷恵子編著『スポーツ･ジェンダー学への招待』：42-50.

――――，2004b,「近代スポーツの発展とジェンダー」飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』：33-41.

Scott,J.W., 1988, *GENDER AND THE POLITICS OF HISTORY,* Columbia University Press（＝1992,　荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社）.

田中東子，2012,『メディア文化とジェンダーの政治学－第三波フェミニズムの視点から』世界思想社.

登丸あすか，2007,「トリノ冬季オリンピック開会式における女性の役割－－テレビニュース報道の分析から」『スポーツとジェンダー研究』5: 45-55.

――――，2010,「ジェンダーの視点によるオリンピック開会式分析－－メディアのガイドラインに照らして」『文京学院大学人間学部研究紀要』12：141-150.

梅津迪子，2004,「第５節　女性スポーツの商品化」飯田貴子･井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店：110-117.

山本清文，2015,「ソチオリンピックにおける新聞報道の分析」『花園大学文学部研究紀要』

47：115-138.
――――・中村浩也・武内麻美，2016,「ソチオリンピックにおける新聞報道の分析（２）―競技種目別に注目して―」『花園大学文学部研究紀要』48：27-41.
山根（吉永）智恵・朴　珍希，2016,「ロンドンオリンピックの日韓新聞記事における一考察」『山陽論叢』第21巻：173－195.

Gender Differences in Television News Coverage of Olympic athletes featured on Japanese Television during the London Olympic Games

Naomi Kobayashi

This thesis mainly aims to reveal the role of gender as a factor in the nature of Japanese television news coverage of the events surrounding the London Olympics. I formulated five Research Questions based on previous research. They are as follows:

Research Question 1：Female and male athletes will receive coverage relative to their proportions on the Olympic team.
Research Question 2：Female and male athletes will receive coverage relative to the proportions of Olympic medals they win.
Research Question 3：Female athletes competing in sports more strongly linked to feminity or dressed in ways that highlight gender difference will receive more coverage than those comparing in other sports.
Research Question 4：Female athletes who win medals in sports that are historically linked to national identity will receive more coverage than female medal winners in other sports.
Research Question 5 : In coverage of the Olympics, Female athletes will attract media attention in the point of their looks, age and private lives.

The verification of the results shows that Japanese female athletes at the London Olympics did in fact receive more coverage than their male counterparts. However, female athletes received more reports than the number of Olympic medals they won. Kaoru Matsumoto, who won the Olympic gold medal in women's judo, was widely reported in Japanese news. This research provides sufficient evidence to conclude that Japanese television news focused more on female athletes' private lives, looks, and emotions than male athletes'. But at the same time, female athletes were praised for their athletic ability.